

1. クラフツマンの我が家(p102-104)

- ・ 作業場…クラフツマンのホーム
中世の作業場では、寝泊まり、子育てなど行う。
↓
何百、何千もの人間を収容する、近代の工場
↓
 - ・ カールマルクスら社会学者たち…労働と生活が膝付き合わせて交わる場所として、作業所を見出していた(p102, L6-8)。
 - ・ セネットの指摘…
 - ①中世の作業場は「愛」によって導かれる近代的家族のルールに従うものではなかった(p102, L10-11)。
 - ②作業場はギルド制に組み込まれており、そこからもたらされるのはもっと非個人的な感情的報酬、とりわけ市民としての名誉(p102-103)。
↓現代の化学実験室や、工場の実態をみても・・・。
 - ③自動車工場は作業場という島が連なる群島になっている(p103, L7-8)。
 - ・ 作業場の定義：「人びとが権威の問題に膝突き合わせて取り組む製作現場」
→作業において誰が命令を出し、誰に従うのかという点だけではなく、命令の正当性や従属の厳粛性の根源としての技術にも、注目している(p103, L8-9)。
親方＝達人の技術がある→彼または彼女は命令する権利をもつ&技術を学び吸収しているからこそ、徒弟や職人の従順さには厳粛さがもたらされうる。
 - ・ 権威の反意語：自律（オートノミー）＝他者の干渉を受けないで行われる自己充足的な作業
 - ・ ソ連の労働者たちの事例・・・ソ連の建築労働者は、自分たちの労働を自分たちでコントロールしていたならば、もっと勤勉に働いていたのでは(p104, L1-3)。
 - ・ 成功する作業場・・・正当な権威を、紙に書かれた権利と義務のうちにはなく、生身の人間のうちに確立している(p104, L7-8)。
↓
 - ・ クラフツマンの社会史＝権威と自律の諸課題に正面から取り組んだり、それらを回避したりする作業場の物語 (p104, L12-13)
2. ギルドの家(p105-119)
- ・ 中世のクラフツマンの権威・・・キリスト教徒であるという事実によるもの
↓
 - ・ 初期キリスト教・・・起源からクラフツマンの威厳を含む

例) キリストが大工の息子であること、アウグスティヌスがアダムとイブは園で働くことができ幸福と考えていたこと

- ・ キリスト教によるクラフツマンの受容・・・労働は人間の持つ自己破壊の性向を中和することができると考えられていた(p105, L7-8)。

例) 手仕事は、平和的で生産的だという認識

↓ゆえに、職業聖人が登場。

- ・ 中世期の職人聖人・・・金属加工職人である、聖ダNSTANと聖エセルワールド
穏やかな勤勉性ゆえ、尊敬されていた(p105, L9)
- ・ 中世キリスト教が恐れていたもの・・・人間のパンドラ
- ・ キリスト教の起源・・・多神教時代のローマは、人の手の動きはその魂について多くのことをあきらかにしうると信じていた(p105, L11-12)。
- ・ キリスト教の静修の理念・・・人は物質的な事物への執着から遠ざかれれば遠ざかるほど、人為によらない永遠なる精神的生活の発見にますます近づいていく、という確信に根拠を置いていた(p106, L2-4)。

↓

教義的には、クラフツマンは、人類に対するキリストの出現を象徴しているが、キリストの存在を象徴するものではなかった(p106, L5-6)。

- ・ 中世初期のキリスト教徒のクラフツマン・・・地上における精神的故郷を修道院に見出す例) ザンクト・ガレンの修道院＝壁に囲まれた山中の避難所

修道士たちは、庭を作ったり、大工仕事を行ったり、薬草を調合したりしていた(p106, L9)。

近くの女子修道院では、修道女たちが一日の多くの時間を費やして機織りや縫い物などの実際の活動に従事していた(p106, L11-12)。

→自らの存続に必要なもののほとんどを生産。

※修道院といっても、お祈りをずっとしていたわけではなかった！

- ・ 12-13世紀：作業場は神聖でもあり、世俗的でもある場所になっていく(p107, L1-2)。
- ・ 都市の司教区・・・多くの私有の家が含まれていた。
- ・ ギルド・・・「王は死なず」という信条を世俗的な表現に翻訳しようとする組合。
- ・ ロバート・ロペスの分析・・・「自律的な作業場の連合体であり、通常、そのオーナーたちがすべての決定を下し、低い地位から昇進するための要件を定めた」(p107-108)
- ・ 宗教的権威の移転・・・宗教的儀式がギルドの都市労働者の毎日のルーティーンを形作るだけでなく、パリの七大ギルドの親方が修道院長に匹敵する道徳的威信が自分にもと主張(p107, L5-6)。

その理由：中世の都市には警察組織が存在せず、街は昼夜を問わず暴力がはびこっていて、通りの暴力が作業場の中・作業場間にもはびこっていたため。作業場の秩序安定のためには、権威を呼び起こす必要があった。

※権威 (auctoritas) = 恐怖と畏怖を呼び起こし、そうすることで服従をも呼び起こす人物の意味

- ・ キリスト教道徳による女性の排除・キリスト教道徳は、都市のクリスチャンのクラフツマンのうちに「男性」を形成(p108, L12)。
- ・ 初期キリスト教の教義・自由時間=誘惑、余暇=怠惰を招く→女性に対して向けられていた。

例) イブは誘惑する女、男の心をかき乱して仕事から遠ざけてしまう

教父たち・女というものは、もし彼女らの手を忙しくさせるものが何ものなければ、いとも簡単に性的放埒に陥ってしまうと想像(p108-109)。

↓ゆえに・・・

織物・刺繍・針仕事など、女の手をいつも忙しくさせる特定のクラフトによって、女の誘惑は相殺できる！と考えられるように(p109, L1-2)。

- ・ 女性の怠惰に対する療法としての針仕事・起源は、ヒエロニムス。
↓しかし、時が経つにつれて、女性の針仕事は、中世初期までには名誉の源に。
- ・ 歴史家エドワード・ルシー・スミスの指摘・「女王たちは織物をしたり縫い物をしたりをすることを羞じてはいなかった」(p109, L6)
しかし・・・。クラフツマンシップの「男性」は、ギルドの正式メンバーとして女性を受け入れることはしなかった(p109, L9-10)。
- ・ 中世のギルド・男性の権威は、親方・職人・徒弟という三階層に体现される。
- ・ ギルド内での昇進：
第1段階 7年目 徒弟の「傑作」
第2段階 認定から5年-10年後 「最高傑作」
- ・ 徒弟・模倣に意を尽くす=技術は複製によって習得されるという考え(p110, L6)
- ・ 職人・経営的能力を示し、未来の指導者としての信頼性を証明してみせなければならない(p110, L8-9)
- ・ 中世の作業場・進歩を導く教師とそれを審判するものが帯びている権威という点で、特筆すべきもの。親方の裁定は最終的なものであり、不服を申し立てることはできなかった。→彼自身の人格のうちに、権威と自律を併せ持っていたから。
↓よく分かる例として、中世の金細工をみていく。
- ・ 中世の金細工・徒弟は、貴金属を溶解・精錬・計量する技術を習得している間は移動を許されない。地元で傑作を披露してはじめて、職人として都市から都市へと移動できるように。旅回りの職人金細工師は、よその都市のクラフツマンの親方の組合に高度な技術を披露し、経営能力を示して道徳的に振る舞うことによって、親方の一員になれることを納得させる必要があった(p111, L7-8)。
- ・ イブンハルドゥーンの指摘：よい親方は「移動する家を主宰している」(p112, L1)

- ・ 都市ギルドがもっていた大きな懸念点・ ・自分たちのギルドが製作したものではなく新しい製品が溢れかえる市場(p112, L2-3)
 - 都市の入り口で懲罰的な通行料金・関税をかけたたり、都市内での市開催を厳しく制限することで、その脅威を遠ざけた(p112, L5-6)。
- ・ ギルドの互助会・ ・ギルドの成員たちは、強力な共同体意識を持つ。
 - 旅している職人たちは、ギルドのネットワークを用いて連絡を取り合う。
 - 念の入った儀式は、ギルドの成員たちを結びつける働きをする。
 - 女性も含む連合互助会が存在。
 - 社交的行事の開催・墓地購入に至るまで、困窮した職人たちに手を差し伸べる。
 - 「中世の職人すべてにとっての、唯一にしてもっとも切迫した地上的義務は、個人としてよい評判を獲得することであった」(p113, L8-9)
- ・ 「権威」・ ・クラフツマンにとっての権威は、社会的なものだけではなく、技術の品質のうちに存在するものでもある(p114, L1-3)。
- ・ 金細工師の場合・ ・親方の権威を確立する立派な技術は、倫理と切り離せないものだった(p114, L3-4)。

↓

 この倫理的規範は、金細工に経済的価値を付与する技術的活動、すなわち「試金」の際にあらわになる(p114, L4-5)。
- ・ 金細工師の役割・ ・原鉱から金を精錬することはむろんのこと、ごまかされた材質に関して真実を語ること(p114, L6-7)。
- ・ ギルドの名誉・ ・高潔さを強固にすることにあるとされていた(p114, L8)
 - 正直なクラフツマンの世評は、政治的にも重要。
 - 貴族・市政府の富がほんものであることを保証するのは、金細工師だったから(p114, L10-11)。
- ・ 13世紀・ ・金の試金は宗教的儀式に。特別な祈禱によって神聖化。親方は神の名において金の保有量を宣誓。
 - 近代的な意味では科学的ではない。1回の試金で成果を上げるようになったのは、ルネサンス終盤になってから。それ以前では、多くのテストが必要だった。
- ・ 直接手で触れること・ ・金細工師にとって、もっとも重要な部分は触れたときの感覚に左右されていた。中世では、触覚それ自身に魔術的・宗教的な属性が付与されていた。
 - 例) 「王による接触」で病が治る!
 - ⇒ゆえに、1回テストするだけで瞬時に得られる結果のほうが、怪しげなものに思われた(p115, L12-13)。
- ・ 金細工師と錬金術師の関係を形作ったもの・ ・倫理
- ・ 英国の歴史家キース・トーマスの指摘・ ・「一流の錬金術師たちの多くは、自分たちのことを、金を求める露骨な欲望に身を任せているのではなく、厳格に精神的な学問的探究を行っている人間だと考えていた」(p116, L3-4)

⇒金細工師と錬金術師は同じように純粹の探求に従事する、いわば同一のコインの両面 (p116, L6-7)

- ・ 中世のギルド・・家族内の階層性に基礎を置くが、必ずしも血縁による絆ではない
- ・ クラフツマンの親方・・彼の配下にある職人や徒弟の親代わりの立場にあった。
預かった息子の技術を向上させるという誓約をさせられた。

「親方のご都合主義」から徒弟たちを護るもの。

徒弟たち・・宗教的宣誓によって、親方の技術を外部に漏らさないという契約をする
⇒これらの法的・宗教的契約によって、生物学的絆からは得ることのできない、**感情的報酬**がもたらされた(p117, L13-14)。

ギルドの宗教的宣誓は、代理父と代理息子の上に、単なる孝順にとどまらない、**相互の「敬意=恩典」**を確立するものだった(p118, L2-3)。

アリエスの研究：ギルド的生活における権威と自律の関係を解明するもの

→子どもを、小さな大人として遇することを拠り所にしてきたから(p118, L9)。

技術を伝えるという代理父の誓約は、青年が自分の家の親方=主人になれるように事業を引き継がせる実父の権力よりも、もっとたしかな保証になった(p118, L17-18)。

- ・ 中世の作業場・・愛よりも**名誉**によってつながれた家(p119, L6)

親方・・権威の拠り所を、技術の移転に置いていた。

子どもの進歩に対する代理親の役割。愛を「与える」ことはなかった。

複雑な内面の隅々まで思いやり、まったく寛容さに溢れる**愛は、クラフツマンシップの主眼ではなかった**のである(p119, L13-14)。

3. 親方の自立(p120-134)

- ・ 技能と芸術・・「技能と芸術はどこが違うのか？」という疑問。
数という点では、大した疑問ではない。→プロの芸術家は人口のほんの一握り。クラフツマンシップ¹は、あらゆる種類の労働に及んでいるから。
- ・ ジェイムズ・メリルのコメント：「もしこの境界線がほんとうに存在するとしても、詩人自身がそれを引くべきじゃないね。詩人はただ詩を発生させることに専念してればいいのさ」(p120, L9-12)
↓定義上の悩ましさに潜んでいるのは、他の何か。
- ・ 自律が意味するものを解き明かそうとしている
- ・ マーゴット・ウィトカウアー&ルドルフ・ウィトカウアーの『土星のもとに生まれて』：自律が意味するものを解き明かそうとしている
→ルネサンスの芸術家がクラフツマンのコミュニティから出現する様子を描く。
①近代社会ではクラフツマンは外向的に彼のコミュニティに向かい、芸術家は内向的に彼自身に向かう。
→この文化変動にパンドラが再現されている。

¹ 訳では、職人的技能と記載されている。

②主観性がもたらす暗鬱な成り行きが、ルネサンス的思考のうちに見られた。

→くよくよと考え込む内向的な「気質」が隆盛を極めている時代の、人間の条件。

- ・ ウィトカウアー夫妻にとっての芸術・クラフツマンよりも、もっと自律的な社会的基盤の上に芸術家を位置付けるもの

理由：芸術家は自分の作品に対して独創性を主張している！

独創性は、単独の、孤立した個人の特性。

芸術はユニークな、あるいは少なくとも独特な作業への関心を引き付けるもの

クラフトとして挙げられるのは、匿名的・集团的・継続的な実践。

↓しかし・・・。

- ・ この対照性への疑問（セネットの考え）：独創性はまた社会的なしるしでもあるし、独創的作品は他の人びととの独特なつながりを作る(p122, L17-18)
- ・ ルネサンスの芸術家・宮廷社会が大きくなるにつれて、パトロンと彼らの芸術の市場が変化。依頼人は工房の親方と個人的関係を持つように。依頼人は、作品の価値を判断する自分たちの権威を振りかざす。
- ・ ルネサンスの金細工師ベンヴェート・チェッリーニの『自伝』・・・これらの問題を率直に吐露するもの

↓

①自分の経歴（逮捕歴など）

②仕事に関わることについて

- ・ 「金の塩入れ」のエピソード・・・ミケランジェロのレベルに達した！という自慢話の根拠
- ・ 技能起業家が望んだもの・・・助手たちにはただ賃金を払うだけで、彼らを訓練する義務を負わずに済ますこと(p123, L2-3)。

彼らの成功＝「名前」を確立できるかどうか。

→個人的になっていく差異化＝卓越化の微候を示すもの

ルネサンスの物質文化では、製作者の名前を出すことが多岐にわたる製品の販売にとってますます重要に。

⇕

中世のギルド・・・カップやコートを製作した人物ではなく、それらが製作された場所が公表されていた。

- ・ アラン・ド・リールの『アンティークラウディアス』・・・金細工師と他のクラフツマンとの関係にある変化が1100年ごろに現れていることを言及するもの
- 以前：金を装飾品に細工する諸形式が絵画とガラス製造のペースを定め、金縁がその内側の製品を方向付ける
- 以降：絵画と彫刻が大変な支配力をふるうようになる。金細工師たちは昔なら考えられないほどに、デッサン・立体感表現法の腕を磨く必要性
- チェッリーニの作品はこうした過程の一産物

- ・ チェッリーニ・クラフトの作業場に対して一定の忠誠を尽くす。純粋にこだわり、『自伝』を存命中はあえて出さないようにしていた。
→それでも、作品は公的価値があるとみなされていた。
フランソワ1世も、塩入れをみて「これはチェッリーニそのものではないか！」と叫ぶ (p127, L10-11)。
- ・ 権威・権力という基盤に依存
→ルネサンスの画家のアトリエは、中世の作業場や現在の科学の研究所とほぼ変わらない (p128, L2-3)。
- ・ ルネサンスの工房・親方の独自の才能のために存在
画家の助手は、親方本人がいる場所に居続けなければならなかった (p128, L8-9)。
大事なものは、彼の絵画を、もしくは彼の流儀による絵画を創ることだった。
- ・ ソールズベリー大聖堂・チェッリーニの塩入れと同じ意味で独創的なわけではない。
単独の設計者がいたわけでもない。身振りによる指示で建築が始まり、その身振りが進化して原則となり、三世代にわたって集団的に運用された (p129, L11-13)。
- ・ 独創性の代償・独創性が自律をもたらす損ねることもあった。
中世の金細工師は、共同体の儀式を通じて自らの価値を証明することができた。
(が、独創性を評価するには、ふさわしくない基準)

⇕

独創的でまったく見慣れない作品を目の前に突き付けられた場合、いったいどうやってその価値をはかれるのか (p131, L6-7)。

※チェッリーニですら、苦戦。

- ・ チェッリーニの『自伝』に注目する最後の理由・報われない依存と意見の相違のために、彼の自意識が高められたということ
→ここにおいて初めて、ルネサンスの芸術家は象徴的な近代人間となったといえるだろう (p131, L14-15)
- ・ チェッリーニの物語・クラフトと芸術の間に横たわるある種の社会学的対照性をあきらかにしている。

①行為主体という点で大きく異なる。

芸術・1人の指導者もしくは支配的な行為者をもつ

クラフト・共同の行為者をもつ

②時間的な差異がある。

芸術・突然/クラフト・ゆっくり

③「自律」という点でまったく異なっている。

※この差異については、最後の疑問の部分で確認したい。

↓

この3つの差異は、現代においても、プロの芸術家という小さな集団に属していない人びとにとっては、その実質において、大きな意義を持っている(p134, L6-8)。

- ・ ソ連の労働者&英国の医師たち・・・自分たちが行っている仕事そのものではなく、その仕事組織される仕方によって苦痛を感じている。
- ・ 作業場・・・今も昔も、仕事上の儀式=日常的行為を介して、人びとを結び付けてきた。
- ・ 現代の経営イデオロギー・・・もっとも地位の低い労働者にすら「創造的」に働き、**独創性を発揮**することを強く求めている(p134-135)。

↓

過去においては、独創性の発揮は煩悶をもたらす結果になっている(p135, L1-2)。

4. 「彼の秘密は彼とともに死んだ」ストラディヴァリの作業場にて(p135-146)

- ・ 長く存続する作業場の限界・・・知識移転の難しさ

↓

なぜ??

- ・ 音楽学校・・・知識移転は困難ではない。表現は絶えず分析されて、磨き上げられていく(p136, L5-8)。

⇕

- ・ 楽器の製作・・・莫大な金をかけても、ストラディヴァリら、巨匠の秘密を探りだせない(p136, L10-11)。

→彼らの作業場の特性に潜む何かが、知識移転を阻んできたに違いない(p136, L12-14)。

- ・ ストラディヴァリの作業場・・・

目覚めている時間はすべて労働に費やされていた。

家族や徒弟たちで一杯。

- ・ ストラディヴァリの仕事・・・最後の部品の取り付け、ワニス塗り

※家の中で絶えず移動して、じっくりと指示を与え訓戒を垂れながら時として癩癩を起す。

→チェッリーニの作業場と同様、ひとりの卓越した個人の才能を中心に活動が行われる場所だった(p139, L1-3)。

↓チェッリーニとの違いは・・・。

- ・ **自由市場**の出現・・・親方は、少数のパトロンではなく、自由市場に身をさらすように。
- ・ 経済の衰退・・・野心的な徒弟は、年季奉公契約の残りの期間を買い取ったり、頼み込んで免除してもらうように。=自由市場は、親方が支配力をふるう期間を短縮した。
- ・ 作業場の終焉・・・ストラディヴァリの息子たちは、父親から天才になるための方法を教えられていなかった。
- ・ ストラディヴァリの再現・・・①楽器の形態の精確な物理的コピー②ワニスの化学的分析③音色から遡って推論 の3方向から取り組まれてきた。

↓しかし・・・それらの分析に欠けているのは・・・。

- ・ **暗黙知**・・・作業場で発生し、習慣的事柄になっているもののこと。無数の小さな日常的動作が積み重ねられてまとめ、ひとつの実践＝習慣になったもののこと (p141, L13-14)。
- ・ **ストラディヴァリ**・・・私たちが知っているもっとも意義深い事実は、彼が作業場の全体を見渡していて、あらゆる場所に不意に現れ、何千もの断片的な情報を、たった一つの分担しか受け持たない助手たちには思いも寄らない意味を持つものとして、寄せ集めて調整するということである(p142, L1-2)。
→科学の研究所の場合でも当てはまる(p142, L3)。

↓観察を抽象的に述べると・・・。

- ①親方＝名工の個性と独自性が支配する作業場では、暗黙知もまた支配的な力を振るう
- ②親方が死ぬ・・・彼もしくは彼女が仕事全体に結集していたすべての手掛かり、所作、洞察が再現不能に。
- ・ **管理状態の良い作業場**・・・理論上は、暗黙知と明示知のバランスが取れているはず。
→親方は自分が行っていることの意味を平明に説明するようせがまれるから。
※親方にそれが可能で、その気があるのであれば・・・。
- ・ **親方の権威**・・・他の人びとには見えないものが見えたり、他の人びとが認識しないことを認識したりすることに由来＝彼らの権威は、沈黙のうちに現れる (p142, L16)。

↓セネットの問い

作業場をもっと民主的にするために、ストラディヴァリのチェロ・ヴァイオリンを犠牲にしたいと思うだろうか？(p142, L17-18)

- ・ **ジョン・ダン**・・・17世紀に、知識移転という問題にもっとも敏感だった人物
有名な詩句→独自性の問題を、科学的発見の観点から表現し、革新者を、一般に受け入れられた真実と伝統の灰から立ち上がる不死鳥として想像(p143, L2-3)。
- ・ **天才たちの秘密の再現困難性**・・・クラフトの2つの品質規範①「絶対的な標準」②「実際の品質」の対照性をあきらかにする。
- ・ **巨匠たち**・・・絶対的標準＝再現不能であることがある基準を設定
- ・ **現在の弦楽器職人**・・・無益な模倣にがんじがらめにされずに、自分自身の才能に応じて可能な限り最良のヴァイオリンを作りたいと考えている。＝正しさに対抗する実践の主張。
- ・ **マーTONの考え**（「巨人の肩の上に立つ」）・・・科学における知識の伝承を説明しようとしたもの。

①偉大な科学者の仕事は、用語の指示内容を定め、より劣位にある科学者たちがその周りを回るための軌道を設定すること(p144, L14-15)

②知識は追加的、累積的であること(p144, L15)

技能仕事・・・マーTONの考えはソールズベリー大聖堂の建築者たちに当てはまる。

ストラディヴァリの作業場・・マートンの考えを当てはめるのは困難。

→弦楽器職人の肩の上に立ちたいという願望は、彼の死後ずっと存在し続けてきたが、「巨人」についていくら考えても、いずれは怖じ気をふるうのがオチだから(p145, L5-8)。

- ・ 作業場の歴史・・人びとを堅く結束させるための処方薬を示す。

→必須の成分は、①宗教&②儀式。

- ・ 世俗的になったとき・・処方薬は、独創性に置き換えられた。

実践的な観点からいうと、自律とは別の状況。

作業場では、独創性は新しいかたちの権威を、多くは短命で暗黙の権威を意味していた。

- ・ 近代世界・・宗教的権威だけでなく、人格化されたかたちの権威に従属することにも当惑するようになった。
- ・ ラ・ボエシの意見・・・称賛や伝統を介しての隷属は放棄されなければならない。

↓もしそうなら・・・。

作業場はクラフツマンにとって快適な我が家ではありえないだろう。なぜなら仕事場の真髄は、膝突き合わせ、人格化された知識の「権威」にあるからである。(p146, L12-14)

- ・ クラフツマンの作業場・・自律と権威がせめぎ合う近代の、おそらく解決不能の闘争が演じられている現場(p146, L17-18)。

5. H松の疑問・感想

- ・ 中世の親方が受け取っていた感情的報酬とは、弟子を育て上げたという名誉ということだろうか？

- ・ 芸術とクラフトの3つの違いのうち「自律」について。クラフトは共同体に認められることで自律するが、芸術は自身の独創性を社会から否定されることで初めて自律するという整理でよいのだろうか？セネットの整理がよく分からなかった・・・。

- ・ 中世のギルドの在り方は、学位の取り方に残っている（学問分野に未だ息づいている）のではないかと思った。修士論文(マスター)→博士論文(ドクター)→助教→准教授→教授とステップアップしていく流れが、「傑作」「最高傑作」と披露して、元々の都市以外の親方たちに認められて一人前になっていく姿と重なった。大学のゼミは、「愛よりも名誉によって繋がれた家」である中世の作業場のようなものと言えるだろうか。

※p119の2行目で、セネット自身も「代理親制は、現代の学校では、現実なのである」と一言記載しているが、念のため確認したい。